



# ピグマリオン保育の実践

～保育催眠の活用～

増田多美子（社会福祉法人 暁福社会 岡崎保育所）

## 1, ピグマリオン保育について

保育者が、対象者の可能性を信じ、それを引き出し伸ばすことに心を注ぐ保育を、「ピグマリオン保育」という。特に保育実践の場では、対象者の向上心に灯をともすために、催眠の原理を意図的・積極的に活用し、相手の心の防御を外し、相手の持っている力を使って、こちらの求めているように相手を変える保育方法のことを、「ピグマリオン保育」と呼ぶ。

今や、幼児教育のみならず、小・中・高・社会人に至るまで「心の教育」が叫ばれて久しい。この事例は、どの園にもある保育の事例にピグマリオン保育の理念とやりとりを当てはめた実践である。

## 2, 私が保育の場で使っている催眠の原理

催眠（深層心理へのはたらきかけ）とは

- A 快条件反射の成立と繰り返しによる欲求の充足である。
- B 保育者と乳幼児の望みが一致した時成立する。
- C 心や行動の変容を起こすことを援助することである。
- D 幼児の発達や幸福のために意図的に心理反応を引き起こすための技術である
- E 心のキャッチボールの技術のことである
- F 濁った心の状態を澄んだ美しい心の状態に導くことである。

## 3, 事例

ひとつボタンをかけ違えると、誰かれかまわず物は投げる、泣く、暴言を吐く、噛みつく、ひっかく等の表出が多い3歳児の保育に実践した事柄

- 催眠の原理を活用し、存在感の伝達、見守り・受容・情緒安定等、心の琴線に触れるような語りかけにより、心の変化に意識を向けさせる。
- 美しい心の部分を自ら意識できるようなアプローチ。
- 快体験と信頼関係の構築を進める。

以上のような一連の保育を繰り返し、6ヶ月を過ぎた頃より、パニックの時短と、バンソウコウ依存からは脱しつつある。しかし、まだ保育士の胸・背中・まなざし執着症は現役である。

## 4, 考察と今後の課題

この事例のように、熱も痛みも伴わず、小児科や嘱託医でも治療の枠外になる心の病気（どの子にも潜在している欲求が、発達途中でつまずいただけの現象ではある）は日常保育の中に山積している。しかも適切な処置を受けることが往々にして見過ごされがちで困難な病気と言える。だからこそ、この治療には十分な時間と労力を費やすべきであり、そのために保育者自身も自己催眠などにより、安定した心理状態での保育実践ができるよう勉強していかなければならない。